



生誕150周年のアクチュアリティ : 2014年のドイツにおけるマックス・ウェーバー研究の動向

橋本, 直人

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 9(1):91-98

(Issue Date)

2015-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009128>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009128>



生誕150周年のアクチュアリティ —2014年のドイツにおけるマックス・ウェーバー研究の動向—

What is the Actuality in 150th Anniversary?: Research Trends on Max Weber in the Year 2014 in Germany

橋本 直人*

Naoto HASHIMOTO*

要約: 2014年はドイツの社会学者マックス・ウェーバー (1864-1920) の生誕150周年であった。本稿は、ちょうどこの年にドイツに滞在した筆者が、2014年時点で絞ってドイツでのマックス・ウェーバー研究の動向を報告するものである。ウェーバー全集 (MWG) の刊行や作品成立史研究の進展、合理的選択理論の導入など2000年代の動向を踏まえ、管見の限りで2014年の動向の特徴と考えられるのは以下の3点である。(1) MWG 刊行の進展を軸とした2000年代のウェーバー研究の活況は、2014年時点では一種の小康状態にある。(2) 生誕150周年に関するシンポジウム等を見る限り、現在の研究動向は①グローバル化の進展という現代的状況からウェーバーをとらえ返す「グローバル化アプローチ」と、② MWG 刊行を踏まえウェーバーを歴史的文脈に位置づけなおす「歴史的アプローチ」が大きな動向と考えられるが、いずれも新たなウェーバー解釈の方向性を打ち出すには至っていない。(3) アカデミズム外ではウェーバーの新たな伝記が3冊も出版されるなど活況だったが、この「活況」がかえってウェーバーを歴史上の偉人に祭り上げるおそれもありとしない。以上を踏まえて筆者は、むしろ新たなアプローチから改めてウェーバーのテキストを緻密に読解する作業が必要と考える。

1. はじめに

筆者は2014年3月末より約10ヶ月間、本学の若手教員長期海外派遣制度によりドイツに滞在するという大変貴重な機会を与えられた。ここで「大変貴重な」と強調するには理由がある。もちろんこの制度による国外滞在そのものが条件面でも極めて恵まれた貴重な機会であり、その点については関係の諸氏に改めてお礼を申し上げるが、それだけではない。というのも、筆者の研究テーマはドイツの古典的な社会学者であるマックス・ウェーバー (1864-1920) の理論的変遷なのだが、2014年はちょうどウェーバー生誕150周年にあたる年だったからである。

とはいえ、生誕150周年だからウェーバー研究が活況を呈しているかという、実は必ずしもそうではない。筆者が滞在したハイデルベルク大学での受け入れ教員であり、世界的に著名なウェーバー研究者でもあるヴォルフガング・シュルプター名誉教授の言を借りるならば、「研究外の世界では活況だが研究状況自体は必ずしもそうではない」という、やや奇妙な状況にあったと言えよう。

そこで本稿では、生誕150周年という時点でのドイツにおけるウェーバー研究のこうした状況について、背景を含めて概観したい。そしてそこから、今後のウェーバー研究にどのような展望が見出せるのか、若干の考察を試みたい。

2. 2000年代ドイツの研究動向——2014年の背景として

まずはドイツにおけるウェーバー研究の現状を理解するために必要な、最低限の背景を確認しておこう。

第一に、ドイツに限らず現在のウェーバー研究全体の動向にとって最も重要な背景の一つは、マックス・ウェーバー全集 (Max-Weber-Gesamtausgabe、以下 MWG と略) の編集・刊行の進展であろう。この全集は著作・書簡・講義録の全3部、分冊も含めれば54巻に及ぶ大規模なものであり、1984年刊行の初期著作『ドイツ・エルベ川以東地域の農業労働調査』[MWG I/3] からスタートしてまだ刊行中である。そして特に、伝統的にウェーバーの主著の一つとされてきた『経済と社会』の編集をめぐっては、これを体系的にまとめられた一冊の主著と本当に呼べるのか否かという大論争が長年にわたって交わされてきた。その『経済と社会』全集版の刊行が、1999年の「都市」章 [MWG I/22-5] から始まり、総索引と解説巻を除く全6冊の刊行が2013年によりやく完結したのである。したがって、2014年はウェーバーの生誕150周年であったとともに、MWGの主要部分が刊行されたという意味で「一区切りついた」という感覚が一般的な状況でもあった (とはいえ、有名な『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と関連の諸論考はまだ出揃っていないのだが)。

第二に、MWG 刊行と並行するかたちで、作品成立史研究が近

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

(2015年3月31日 受付)
(2015年4月15日 受理)

年の（特にドイツと日本における）ウェーバー研究の一大トピックとなっていたことにも留意しておく必要がある。そして上述のように、その焦点の一つは『経済と社会』であった。

そもそも『経済と社会』は、ドイツの出版社であるジーベック社の叢書『社会経済学綱要』（Grundriß der Sozialökonomik, GdS）のためにウェーバーが執筆していた遺稿を、彼の死後に妻マリアンネが3部構成の一書に編集・刊行したものである。その後、ミュンヘン大学のヨハネス・ヴィンケルマンが1956年の第3版より編集を引き継いで2部構成に再編したものが、近年までウェーバーの著者として知られた『経済と社会』であった¹⁾。とはいえ、『経済と社会』はつねづねその理論的体系性が疑問視され、しばしば「巨大なトルソ」とも形容されてきた。これに対して、『経済と社会』が体系的に統一された一書ではないと指摘して論争の口火を切ったのが、フリードリッヒ・テンブルックの論文『『経済と社会』からの訣別』[Tenbruck 1977 (1999)]であった。以後、ヴィンケルマンからの反論[Winckelmann 1986]とシュルフターの論争への参入[Schluchter 1988: (2) 597-634=1990: 1-56]、さらにシュルフターや折原浩による論争[折原 1988, 1996; シュルフター/折原 2000; Schluchter 2009 usw.]などへと引き継がれ、『経済と社会』成立史がウェーバー研究の一大テーマとなってきたのである。

こうした作品成立史研究の進展を通じ、現在では(1)『経済と社会』としてまとめられた遺稿が1910年から第一次世界大戦をはさみ1920年まで、複数の時期に執筆された草稿群からなること、(2)『経済と社会』がウェーバーのもう一つの著者である『世界宗教の経済倫理』²⁾との「著作間分業」関係にあること、がほぼ共通了解となっている。そして、なお批判はあるものの、以上の研究史を経てMWGでの『経済と社会』および『世界宗教の経済倫理』刊行が完結したことにより、作品成立史研究にも「一区切り」という感が生じることとなったように思われる。

最後に、ドイツ（およびドイツ語圏）特有の状況として、2000年以降のウェーバー研究が合理的選択理論（ドイツ語でRational-Choice-Ansatz、以下RCA）の本格的な導入の影響下に展開されたことが挙げられよう³⁾。

シカゴ大学のジェームズ・コールマンが1990年に刊行した著書『社会理論の基礎』[Coleman 1990]は「社会学における合理的選択理論の決定版」[富永 1995:157]とも評されるRCAの代表的著作であるが、早くも1991年から94年にかけてドイツ語訳が出版されている。そしてそれと並行して、ドイツ語圏でもRCAに基づく研究が数多く生み出されることとなった。たとえばマンハイム大学のハルトムート・エサーはRCAを基礎に社会学のパラダイム乱立状況を克服する「統合的社会学」を提唱、1993年に著書『社会学』第1巻「一般的基础」[Esser 1993]を刊行したのち「個別的基础」と題する各論の諸巻を順次著し、最終的には2001年の各論第6巻「意味と文化」[Esser 2001]まで、全7巻に及ぶ壮大な理論的構想を提示した。また、リトアニア・ビルニウス大学のゼノナス・ノルクスは『マックス・ウェーバーと合理的選択』[Norkus 2001]において、RCAの立場から作品成立史に踏み込んだウェーバー解釈を行なってウェーバーの理論の中にRCAの萌芽を見出し、あえて言えばRCAにウェーバーを「取り込む」こ

とを試みた。これに対して複数のウェーバー研究者が、たとえばノルクスについてウェーバーの理論を「RCAのマイナー・バージョンと位置づける」[Schluchter 2005] 試みとして批判し、またエサーに対してもその「統合的社会学」がどこまで統合的なのかを問い返す[Etzrodt 2006] など応答を重ねてきた。そしてその裏返しとして、RCAの導入と並行してウェーバーの理論（特に行為論）とRCAとの差異、そしてウェーバーの理論の固有性を主題する多数の研究が生み出されることとなったのである。だが、2000年から2010年頃までのこうした活況も、近年はやや落ち着いてきたように思われる。

このように見てくると、2014年時点でのドイツにおけるウェーバー研究の状況が「一区切りついた」という意味で「活況ではない」と評されるのも無理のないところかもしれない。とはいえ、やはりウェーバー生誕150周年を記念するシンポジウム等は複数開催されている。そこで以下では、上記の背景をふまえてつこれらの内容を紹介し、その位置づけを考えることとしたい⁴⁾。

3. 2014年のアカデリズム内でのウェーバー

さて、2014年における狭い意味でのウェーバー研究の動向、すなわち専門研究者たちによるアカデリズムの枠内での活動としてのウェーバー研究の状況が「活況とは言えない」ことが端的にうかがえる事実がある。それは、2014年のドイツ社会学会（10月6-10日、トリアー大学）においてウェーバーを主題とする大きな企画も開催されず、主要学術誌での特集もほぼ見られなかった⁵⁾、という事実である。2014年のドイツ社会学会大会のテーマは、おそらくユーロ危機をうけてと思われる「危機のルーティン/ルーティンの危機」であり、およそ180にものぼる企画（パネルディスカッション、分科会、特別講演等々を含む）のうちウェーバーと関係するのは社会学史に関するワーキンググループ（「近年のウェーバー研究の成果」とウェーバーの伝記に関する合評会のみであった。トリアーという土地柄や「危機」というテーマからすれば、あるいはウェーバーよりむしろマルクスの存在感の方が大きかったかもしれない。

このことは、ウェーバー生誕100周年にあたった1964年の状況と対比すればその意味が明らかとなる。1964年のドイツ社会学会はまさにウェーバー記念大会であった。そこでは、テオドル・アドルノやマックス・ホルクハイマーらフランクフルト学派によるウェーバーの合理性論・客観性論への批判、著書『マックス・ウェーバーとドイツ政治』[Mommssen 1959]でウェーバーを帝国主義者と批判し一躍注目されたヴォルフガング・モムゼンとアメリカ社会学の巨人タルコット・パーソンズとの論争、さらにユルゲン・ハーバーマスによるウェーバーとカール・シュミットとの関連の指摘など、以後の研究動向を大きく左右する論点が数多く提示されていたのである⁶⁾。こうした端的な事実からして、「2014年は1964年ハイデルベルクの第15回ドイツ社会学会とは比べるべくもない」「メディアの注目という点では、ウェーバーの生誕記念は第1次世界大戦勃発100周年の陰に隠れてしまった」[Ettrich, Müller 2015] という評価も首肯されよう。

それでは、このような状況にある2014年という時点において、ウェーバー研究者たちはどのようなアプローチをとっていたので

あろうか。それを知る上での一つの手がかりは、2014年に開催されたシンポジウムなど⁷⁾の内容であろう。

専門研究者によって2014年に開催されたウェーバー関連のシンポジウム等として、筆者が管見の限りで確認できたのは4件である。そのうち2件については出席し討議にも参加できたので、その状況も含め内容を概観することで、アカデミズム内でのウェーバー研究の動向、あるいはそこに見られるウェーバー研究のアプローチを探ることとしたい。

まず、4月3・4日にハイデルベルク大学の社会学科(Max-Weber- Institut für Soziologie)で開催されたのがシンポジウム「古い概念／新しい問題——現代の問題状況から見たウェーバー社会学」である。以下、プログラムの概要を挙げておく。

[1日目]

冒頭講演：ゲルト・アルバート「概念形成の合目的性と文化被拘束性に関する科学理論的考察」

第1部「現代のナショナル・トランスナショナルな支配に対してウェーバーの支配類型は何をなし得るか」(報告3件)

第2部「ウェーバーの宗教社会学と現代の原理主義・世俗主義」(報告3件)

講演：ライナー・レプシウス「生活史的・同時代史的文脈におけるウェーバーの社会学的概念構成」

[2日目]

第3部「現代の金融市場資本主義を理解するためにウェーバーの資本主義分析は何を提示できるか」(報告2件)

第4部「モデルネの現代的拡大への歴史的起源：ウェーバーの歴史比較分析の可能性と限界」(報告3件)

第5部「生を取り込む現代の諸勢力(文化産業、モード)はウェーバーの生活態度概念で理解できるか」(報告3件)

講演：ウォルフガング・シュルフター「モデルネはあらたな基軸時代文化か？」

内容の詳細についてはいずれ論文集などの形で公開されるのを待つしかないが、以上のプログラムの概要・表題等からだけでも、このシンポジウムが、グローバル化の進展をはじめとする現代的状況に対するウェーバー理論の意義を主題として展開されていたことは見てとれよう。逆に言えば、1964年の社会学大会のようにウェーバーの理論そのものの理解や解釈、意義が主題的に問われたのでは必ずしもないのではないかと推測される。筆者がそう推測するのは、他のシンポジウムでも同様のアプローチが主導的であったと考えられるからである。

たとえば、同じハイデルベルク大学で11月に開催されたシンポジウム「マックス・ウェーバーと新しい資本主義の精神」は、ちょうど上記シンポジウムの第3部を拡張したようなプログラムであった。こちらも筆者は参加できなかったが、以下に概要を挙げておく。

[1日目]

冒頭講演：ウォルフガング・シュルフター「マックス・ウェーバー 資本主義の精神と新しい経済社会学」

第1部「マックス・ウェーバー、資本主義の精神とその後」(報告5件)

[2日目]

第2部「自己調整 Self-Regulation とグローバル資本主義の生活世界」(報告4件)

第3部「文化越境的な精神と経営コンセプトの拡散」(報告4件)

基調講演：ゲルト・シュミット「マックス・ウェーバーと資本主義の現在」

[3日目]

第4部「コーポレート・ガバナンスとコーポレート政策」(報告6件)

さらに個々の報告の表題を見ていくと、このシンポジウムでも、ウェーバーの諸概念(特に「資本主義の精神」の理論)を参照しつつ、現代のグローバル資本主義、特に経営者・起業家やコーポレート・ガバナンス、また中国・韓国や南米はじめ新興国経済などの問題について論じるという姿勢が基調となっていたように思われる。そうすると、現代のグローバル企業やその経営・ガバナンス、あるいは新興国経済のあり方に対してウェーバーの資本主義論(特に「資本主義の精神」論)がどこまでアクチュアルかは問われなくても、ウェーバーの理論そのものの理解・把握という意味での、狭義のウェーバー研究に対するインパクトはおのずから限定的になるのもやむを得ないところであろう。

他方、筆者が参加した2件のシンポジウムは、より狭義のウェーバー研究に近いかたちで議論が展開されていたが、それでもやはり上記の2件のシンポジウムと共通するアプローチを見て取ることができる。

たとえば、筆者が参加したシンポジウム「マックス・ウェーバーを翻訳する／編集する」(7月2日-4日、エアフルト大学マックス・ウェーバー・コレグMax-Weber-Kolleg)は、各国のウェーバー研究者、特にウェーバーの著作の翻訳者が集まり密度の高い議論を交わしたという点で、まさに狭義のウェーバー研究を主題としたシンポジウムであった。これについても、まずは概要を挙げておく。

[1日目]

エディット・ハンケ「ウェーバー 翻訳のトポグラフィ」

ジャン＝ピエール・グロッサン「『翻訳されない著作は半分だけ出版されたに過ぎない』」

フランク・エトリッヒ「現実科学への途上で？」

[2日目]

第1部「ウェーバーを翻訳する 動機・問題・限界」(報告5件)

第2部「プロテスタントの倫理／世界宗教の経済倫理」(報告4件)

第3部「支配・法・倫理」(報告3件)

[3日目]

第4部「理論/方法論」(報告5件)

以上の各部のタイトルだけからはうかがえないが、私見ではこのシンポジウムにおいてもやはり、主な論点のひとつは「グローバル化の中でウェーバーを読むことの意味」であったように思われる。実際、「ウェーバーの翻訳」とはすなわちドイツ語圏以外でのウェーバー受容の問題であって、このシンポジウムでも英米圏にとどまらずフランスやブルガリア、日本と中国、さらにブラジル・メキシコなど、さまざまな地域でのウェーバーの翻訳=受容のされ方とおして、ウェーバーがドイツやヨーロッパ主要国以外からどのように見えているかが議論されていたと言えるだろう。たとえば、上記概要にも見えるエディット・ハンケ（ミュンヘン、マックス・ウェーバー財団）の報告では、ウェーバーの翻訳・受容が日本ではきわめて早い時期（ウェーバーの没後すぐ！）に始まったのに対して中国での受容がようやく1990年代から本格化したことなどを引きつつ、「近代化過程の分析ツールとしてのウェーバー」という受容のされ方が紹介された。他方、モルシージョ・ライス（メキシコ、経済研究教育センター）とマタ（ブラジル、オウロ・プレット連邦大学）の報告は、メキシコ（スペイン語圏）でのウェーバー受容がスペイン内戦による亡命者を通じて比較的早く進んだのに対し、ブラジルでの受容がブラジル社会の上層における植民者のメンタリティによって遅れたことなど、これらの地域ではウェーバーの受容自体がポスト・コロニアル状況に左右されていたことを指摘するものであった。さらにウォルフガング・シュヴェントカー（大阪大学）による、日本での「カリスマ」概念の受容と日常化（！）の動向の紹介、あるいはジャン＝ピエール・グロッサン（リヨン大学）による、ドイツ語の「deuten」および「interpretieren」（日本語ではどちらも一般に「解釈する」と訳される）をフランス語に翻訳する際に生ずる偏差と解釈の問題の指摘などを含め、このシンポジウムでは各文化におけるウェーバー受容の差異が幅広く議論されることとなった。

もちろん、さまざまな思想や理論の翻訳・受容がそれぞれの文化に規定されて多様な差異を生じることは言うまでもない。だが、特にウェーバー研究においてこのことが重要なのは、ウェーバーがまさに「近代ヨーロッパ文化世界の息子」[RS I: 1=1972:5]として西洋近代の有する「普遍的な意義と妥当性」[Ibid.]を主題とした理論家だからである。ある意味でヨーロッパ中心主義とも評しうるウェーバーの理論がヨーロッパ圏外に広く受容されることの意義⁸⁾、あるいはウェーバーの理論がこうした状況においてなおアクチュアリティを有するのか否かという問題が、ウェーバー研究にとってもはや無視できない主要テーマになっていることが、このシンポジウムで（あるいはそのテーマ設定そのものによって）浮き彫りになってきたように思われる。その限りで、このシンポジウムの主題の一つは「グローバル化の中でのウェーバーの意義」であったと言えるし、すでに見た2つのシンポジウムとの共通性をそこに見てとることができるだろう。そしてそれはつまり、こうしたグローバル化からのアプローチが、2014年時点におけるドイツのウェーバー研究者たちの代表的なアプローチの一つだとい

うことでもあろう。

ただし、そこで問題となるのは、グローバル化を背景とするウェーバー受容の広がりという状況が、ウェーバーの理論の理解・把握という狭義のウェーバー研究へと実質的にフィードバックされているか否かである。たとえば、シンポジウムではいくつかの報告でウェーバーの「理解社会学 (verstehende Soziologie)」概念とその英語訳「interpretative sociology」との差異、またそれがウェーバー受容にもたらす効果・影響が論じられたが、それがひるがえってウェーバーの「verstehen (理解)」概念の新たな解釈・把握につながるかと言えば、少なくとも筆者はこのシンポジウムでそうした方向性への契機を見ることができなかった。あえて言えば、グローバル化アプローチやそうした問題設定の重要性は確かに認識されているものの、ウェーバーの理解・把握という狭義のウェーバー研究そのものへとはまだフィードバックされていない、という現状の一端がここに現れているようにも思われる。そしてこのことは、エドワード・サイードなどポスト・コロニアル思想の洗礼を受けた現代の目からすれば極めて大きな課題であろう。異文化への受容を契機として、ヨーロッパ発の思想や文化の新たな側面を露わにするというポスト・コロニアリズムの視点⁹⁾は、まだ狭義のウェーバー研究の領域では十分に受けとめられていないのではないだろうか。

そしてこの点では、筆者が参加しなかった上記2件のシンポジウムもおそらく大きくは違わないだろうと推測される。したがって、このアプローチに関する限り、グローバル化をはじめとする現代的状況の中でのウェーバーのアクチュアリティは問われていても、そこからのウェーバー理論そのものの捉え返し、狭義のウェーバー研究へのフィードバックはまだ始まっていないし、その意味でウェーバー理論そのものの理解や解釈が主眼的に論じられるには至らなかったのではないか、というのが筆者の率直な印象である。逆に言えば、グローバル化アプローチの深化を通じて狭義のウェーバー研究へのフィードバックが進めば、そこから新たな方向性が見出せるとも考えられよう。そしてもしこうした深化が今後実現するならば、2014年の状況は将来、これまでの研究動向が「一区切り」ついた段階から新たな方向性へと歩みだす準備期間として評価されることになるのかもしれない。

さて、このシンポジウムでもう一つ筆者が着目したのは、歴史的な文脈の中へのウェーバーの位置づけというアプローチである。たとえばヨハネス・ヴァイス（カッセル大学、エアフルト大学マックス・ウェーバー・コレグ）やクラウス・リヒトブラウ（フランクフルト大学）の報告は、MWG刊行の進展を背景としつつ、ウェーバーの理論（特にその変化の過程）を当時の歴史的な文脈の中に位置づけるものであった。そしてこうした歴史的アプローチは、筆者が参加したもう一つのシンポジウム「政治的宗派主義 (Politischer Konfessionalismus)」（4月25・26日、フーゴー・プロイス財団）において基調となっていたものでもある。

このシンポジウムについても、まずはプログラムを挙げておく¹⁰⁾。

[1日目]

ディーター・ランゲヴィーシェ「政治的宗派としてのナショナ

リズム」

ウォルフガング・シュルプター「世界の説明図式としての合理化パラダイム」

デトレフ・レーナート「フリードリヒ・ナウマンと進歩主義」
ガンゴルフ・ヒュービンガー「ウェーバー兄弟：文化社会学と民主主義問題」

モニカ・ヴィーンフォート「ウェーバー夫妻：社会政策と女性運動」

[2日目]

ベーター・シュタインバッハ「社会ダーウィニズム：存在をめぐる政治闘争」

ハラルト・ブルーム「官僚制の冷たい死：学問的診断と反進歩主義的退廃信仰」

ティム・ミュラー「ドイツの初期ケインズ主義」

このシンポジウムでの議論は、すでに触れたように2014年が第1次世界大戦勃発100周年だったこともあり、特に第1次大戦前後のドイツの政治・言論状況を中心とする歴史的な文脈とウェーバーとの関連を主題とするものであった。たとえばシュタインバッハの報告は、ウェーバーにおける闘争・淘汰概念や人種概念の分析を通じて社会ダーウィニズムにとっての第1次大戦の意義（諸国民の生存闘争！）とウェーバーとの距離を指摘していたし、ランゲヴィーシェは、ウェーバーの理論全体中での「国民（Nation）」の比重が必ずしも大きくないことを指摘しながら、第1次大戦という状況の中でのウェーバー国家論の位置づけと再評価を行なった。

だが、ここで論じられた歴史的な文脈は、このような「大状況」だけではない。たとえばヒュービンガーは、マックス・ウェーバーと弟アルフレートの第1次大戦に対する態度の共通性と差異が分析していたし、ヴィーンフォートの報告は、マックスの家父長制・家産制概念に対する妻マリヤンネの女性運動・女性論の影響を指摘するものであった。これらは、MWGの特に書簡部門の編集・刊行の進展や、その過程での資料・書簡の発見や整理の進展を背景として、家族関係や交友関係の中でウェーバーの理論をとらえ返そうとする報告であったと言える。

さて、このような歴史的な文脈からのウェーバー理論の捉え返しというアプローチ自体は何ら新しいものではない。先に触れたモムゼンの研究も、ウィルヘルム体制と第1次大戦という歴史的な文脈からとらえ返すことで新たなウェーバー像を提起したのだし、アーサー・ミッツマンの『鉄の檻』[Mitzman 1969=1975]はウェーバーの思想を父親との葛藤という家族関係の観点から分析している。これらに対する2014年の状況の新しさは、やはりMWG（特に書簡部門）の刊行の進展によって資料状況が大きく改善されたことであろう。たとえば第1次大戦に対する態度も、単にウェーバーの理論や政治的発言と当時の状況とを抽象的に対比するにとどまらず、友人や知人、関係のある学者・政治家などへの書簡での発言から具体的に明らかにできるようになったことは、やはり大きな意味があると言える。さらに、家族や友人など親密な関係については、この書簡部門の刊行によってようやく確認された部分も少なくない¹¹⁾。

とはいえ、ここでも事情は先に論じたグローバル化との関係に似た側面がある。すなわち、新たな資料の状況に基づいて歴史的な文脈の中に位置づけることが、ウェーバー理論の理解や把握にどのような新たな光を投げかけるか、その作業はおそらくまだ始まったばかりであろう。だとすれば、このアプローチにおいても、2014年の状況は準備段階にとどまっているのではないだろうか。

このように見てくると、冒頭で紹介したシュルプター教授の「ウェーバー研究自体は活況ではない」という発言は、2014年の現状が、これまでの研究の方向性に「一区切り」ついた段階から新たな方向性を探る準備期間、胎動期にあることを指摘していたとも言えそうである。その意味では、むしろ今後どのような新しい動向が台頭するのかに注目する必要がある。

4. 2014年のアカデミズム外でのウェーバー

さて、それでは同じくシュルプター教授の言う「研究外の世界での活況」とはどのようなものであったか、こちらも概観しておこう。

これも先に見たように、2014年のメディアの注目が第1次大戦勃発100周年に向ったのはあまりにも当然すぎることであり、ウェーバーがその陰に隠れるのは無理もないことであろう。それでも2014年には、たとえば有力紙『南ドイツ新聞（Süddeutsche Zeitung）』が4月にウェーバーの特集ページを組んだり、日本でも有名な週刊論説紙『ツァイト（Die Zeit）』が断続的に論説記事を掲載するなど、メディアでもウェーバーがしばしば取り上げられた。また、たとえばミュンヘンでは、バイエルン学術アカデミー（Bayerische Akademie der Wissenschaften）が4月から5月にかけてウェーバーに関する市民向けの連続講演を開催し、さらに機関誌でウェーバー特集号を発行するなどさまざまな企画が催された¹²⁾。そして何より、ドイツ郵便による「ウェーバー生誕150周年記念切手」の発行はとりわけて「記念行事」らしいと言える。

さらに、もう少し研究に近い事柄としては、先に触れたMWG書簡部門の刊行の進展を背景として、2013年から14年にかけてウェーバーに関する新たな伝記が3冊も刊行され（正確にはうち1冊は第2版の刊行だが）、一斉に書店に並んだことが注目される。以下、これらの伝記について少し見ていこう。

もともとウェーバーの伝記としては、彼の没後ほどなく妻マリヤンネが出版したもの[Marianne Weber 1926]が広く知られていた。だが、そこで描かれたウェーバー像は、しばしば「聖マックス」「寡婦が亡夫に殉じた一例」とも揶揄されるほどに「偉大さ」を強調したものであった。その後、ヤスパースやバウムガルテン等、生前のウェーバーを直接に知る人物の手になる評伝なども刊行されたが、特に第2次大戦後にナチスと関わりのないドイツ社会学の遺産としてウェーバーが引き合いに出されたこともあり、「聖マックス」的なウェーバー像はなかなか揺るがなかった（そこに一撃を加えたのは先に触れたモムゼンである）。

だが、そもそもウェーバー自身が長期にわたり精神疾患に苦しんでいたし（この疾患そのものについてはマリヤンネも詳しく述べている）、またモムゼンも指摘するように、「ワイマール時代から戦後に続くドイツ・リベラリズム」の代表者とも単純には言え

ないような、かなり複雑な人物でもある。そして、MWG 書簡部門の刊行によってようやく、著作から間接的に人物像を推測するのではなく書簡等から実証的に人物像を描く環境が整ってきたのが現状である。このように見てくると、生誕150周年に向けてMWGの刊行が進むとともに新たな伝記が書かれるのは自然な成り行きとも言えよう。

その中で最も早く書かれたのがヨアヒム・ラートカウ（ビーレフェルト大学）による『マックス・ウェーバー 思索の熱情 Die Leidenschaft des Denkens』[Radkau 2013]（初版2005年）である。1000ページ近くに及ぶ（初版では1000ページを超えていた）この大著で、ラートカウはMWGで公開された書簡に加え、当時まだ未公開だった資料や書簡なども利用して、ある種衝撃的なウェーバー像を描き出している。

書評などで「ややエキセントリック」[Thomas 2006: 149]とさえ評されるそのウェーバー像は、端的に言えば、ウェーバーの人生と理論とを性的な抑圧と解放という観点からとらえようとするものである。すなわち、ラートカウによれば、俊英として知られた若きウェーバーは、厳格な母と「同志愛的な」（つまり性的魅力を欠いた）妻からの圧力の下、自らの性的衝動（ラートカウは資料からウェーバーのマゾヒズム傾向を指摘している）を抑圧して仕事へと逃避するが、それが破綻したことで精神疾患に苦しむに至る。その根底にはウェーバーのマゾヒズムと夢精への不安による不眠、それにともなう性的不能があり、しかもウェーバーはこうした「自らのセクシュアリティをむき出しの無意味な自然として経験した」[Radkau 2013: 285]。だが、やがて彼は、フロイトに影響されて性の解放を唱えていたグループとの交流、そしてエルゼ・ヤッフエやミナ・トープラーとの不倫を通じて、自らの「自然」と和解し解放される、というのがラートカウの描くウェーバー像なのである。この「自然」という語の含意を考えると、それぞれ「自然への陵辱」「自然の復讐」「解放と啓示」という表題の3部から構成されるラートカウの描くストーリーは、ある意味で非常に分かりやすい。しかもラートカウは、この「自然」との和解がウェーバーの後期の著作、たとえば「音楽社会学」や『世界宗教の経済倫理』『中間考察』などにも反映されていると指摘するのである。とはいえ管見の限りでは、初版刊行時点ですでに十分センセーショナルだったラートカウのウェーバー像への評価は今なお賛否が交錯しており、ウェーバー理解への新たなアプローチとして十分に認知されてはいないように思われる。

これに対して、ドイツの有力紙『フランクフルター・アルゲマイネ』の論説主幹だったユルゲン・カウベ（現在は同紙編集長）の『マックス・ウェーバー 時代の狭間の生涯 Ein Leben zwischen den Epochen』は、ラートカウのような心理的（ないし精神病的？）なアプローチから一線を画し、オーソドックスなウェーバー像を提示している。カウベはウェーバーを、教養市民的な自由主義と国民国家の時代から官僚制と大衆化の時代への転換期に生きた人物と位置づけるのである。たとえばベルリン郊外のシャルロテンブルクで過ごしたウェーバーの幼少期も、父親のサロンに有力市民や知識人が集う19世紀的な世界と、急速な人口増大とともに大衆化する大都市ベルリンとのせめぎ合いの経験として描き出されるし、ウェーバーの残した有名なフレーズである「精神なき

専門人」や「鉄の檻」も、教養市民層の解体と大衆社会化、官僚制化に対する警鐘として位置づけられることになる。

こうしたカウベのウェーバー像は、研究者からすれば無難な、言いかえれば新味のないとらえ方とも言えるし、また専門的な目で見れば細かな疑問点もなくはない¹³⁾。とはいえ、「エキセントリック」なラートカウのウェーバー像と対比すればきわめて「穏健」なカウベのウェーバー像は、ジャーナリストらしい文章の読みやすさとあわせて、多くの読者に安心して受容されたようである。実際、本書は2014年1月に刊行されたのだが、翌2月には早くも第3刷に至っている。さらに本書の刊行にあわせてカウベが各地で講演を行なったのも、2014年の「研究外の世界での活況」の一翼をなしていたと言える。

3冊の伝記で最後に刊行されたのは、ディルク・ケスラー（マールブルク大学）の『マックス・ウェーバー プロイセン人、思索家、母の息子 Preuße, Denker, Muttersohn』[Kaesler 2014]である。ケスラーもまた、ラートカウと同様にマリアンネ的なウェーバー像の「脱呪術化」を主張する。しかも「ウェーバーは我々の同時代人ではない」がゆえに「我々の生きる現代とかつての時代とを隔てるものを知らなければならない」[Kaesler 2014: 10]というケスラーは、ウェーバーを徹底してその歴史的文脈に位置づけるべく、多種多様な（ないし雑多な）歴史的事実を細大漏らさず羅列していく。その描写は実に多岐にわたり、ウェーバーの生地エアフルトが後期中世（！）に有していた水車の数から、ウェーバーの不倫相手であったミナ・トープラーのハイデルベルクでの住所（番地！）にまで及ぶ。加えて「脱呪術化」のためか逐一マリアンネによる伝記が引用された結果、ケスラーの伝記もラートカウ同様1000ページを超える大著となっている。しかもそのために、かえってケスラー自身の描くウェーバー像の焦点がどこにあるのかがいま一つわかりにくくなってしまった感否めない。もちろん、それら膨大な歴史的事実には見るべきものも数多く含まれているだろう。だが、それが実際に狭義のウェーバー研究にとってどこまでの意義を有するかは、今後の検討を待たなければならないだろう。

さて、以上のような「活況」にもかかわらず改めて気付かされるのは、150年前に生まれた人物の理論や思想のアクチュアリティを現代において見出すことの難しさである。たとえばカウベは伝記の最後に「…総体としての近代社会を分析的に記述するというウェーバーの試みは…今なお一つの課題であり続けている」[Kaube 2014: 440]と記す。だがその直前で、根底に「市民層 Bürgertum への問い」を置くウェーバーのさまざまな定式化がそのままでは現代に通じないことを詳しく論じていることからすれば、この結語は、いかにも取ってつけた「模範解答」という印象を免れないだろう。その点では「ウェーバーは我々の同時代人ではない」というケスラーの断言の方が、端的なだけに説得的に見える。だがそのケスラーによる伝記は、極論すれば歴史的事実のコレクションと化してしまっている。またラートカウの描くウェーバー像は確かに刺激的ではあるが、逆に言えばウェーバーのアクチュアリティはいまやこうした「人間ドラマ」の形でしか見出せないのではないか、という疑念も抱かせる¹⁴⁾。

3冊もの伝記の刊行や、さらには記念切手の発行をはじめ、総じて2014年のウェーバーをめぐる「研究外の世界での活況」は、意地悪く言えば日本での歴史ブームに似たところがないだろうか。生誕150周年を祝されることで、他の偉人たちと並んでウェーバーもめでたく歴史という神棚に飾られることになった、とも見えなくはないのである。

5. 結びにかえて

以上、かなり私見を交えてではあるが、2014年のドイツにおけるウェーバー研究の動向を概観してきた。筆者自身がウェーバーのテキスト内在的な研究に力点を置いていることもあり、上記の概観にも筆者なりのバイアスがかかっていることは間違いない（それはウェーバーの方法論からしても当然のことである）し、その結果として現在の研究動向に対してかなりネガティブな評価になっていることも否めない。

それでも筆者は、すでに3節末尾でも見たように、現在の動向から今後の研究の方向性は十分見出せると考えている。特に、グローバル化した現代社会の状況に対して単にウェーバー理論の適用の可否を論ずるのではなく、むしろウェーバー受容のグローバル化という現状からウェーバー自身のテキストへと遡航し、ウェーバーのテキスト内在的に新たな読解の可能性を見出すことは十分可能なはずである。また歴史的アプローチにしても、単にウェーバーの理論を歴史的文脈の中に位置づけるだけでなく、ウェーバーの理論（すなわちテキスト）そのものを歴史的文脈の中でのウェーバーの選択としてとらえ返すことによってこそ、ウェーバーのテキスト自体の新たな読解が可能になるだろう。だとすれば、今後のウェーバー研究のアクチュアリティに必要なのは、一見逆説的だが、新たなアプローチに基づきつつもテキストの細部にこだわる緻密で内在的な読解を遂行することなのではないだろうか。

柄谷行人の身もふたもない言葉を借りれば、古典とは「それが表示する世界や知識が古びたということに応じて古びている」[柄谷 1990: 9] 書物に他ならない。だからこそ、固定的な図式や体系にまとめるのではなく、微細な読解によってテキストの可能性を見出すことこそが必要になる、と柄谷は主張する。柄谷の議論はマルクスに関するものだったが、同じことはウェーバーにも妥当しよう。神は細部に宿るのである。

脚注

- 1) たとえば世良晃志郎訳の『支配の社会学』[WuG=1960, 1962] 『法社会学』[WuG=1974] をはじめとする創文社版の『経済と社会』日本語訳も、ヴィンケルマン編の第4版（1956年）が底本である。
- 2) 「儒教と道教」「ヒンドゥー教と仏教」「古代ユダヤ教」など、旧来のウェーバー『宗教社会学論集』に「世界宗教の経済倫理」という総題のもとで収録されている諸論考。シュルフターの研究 [Schluchter 1988] などにより、本来はこのあと「西洋キリスト教」「イスラム教」などの論考が予定されていたことがわかっている。
- 3) ドイツにおけるRCAの受容と展開については久慈 [2013] を参照。

4) 以下、2014年のドイツでの研究動向をまとめる上では、特にドイツ社会学会について東京大学の出口剛司氏から、また各種シンポジウム等に関しては大阪大学のウォルフガング・シュヴェントカー氏から、多くの情報・資料を提供していただくとともに、さまざまな示唆を得ることができた。この場を借りて両氏に謝意を表したい。

5) 厳密には、翌2015年3月の『ベルリン社会学ジャーナル Berliner Journal für Soziologie』がウェーバーの特集を組んでいる。だが、この特集は2014年に亡くなった著名な社会学者ライナー・レプシウスの追悼特集を兼ねており、しかも内容を概観する限りではレプシウスの比重の方が大きいように見える。これはおそらく、レプシウスがウェーバー研究においても影響力が大きかった（彼はMWGの編集委員でもあった）ので、レプシウスを特集することである程度ウェーバー特集を兼ねられると判断されたのであろう。

6) 1964年大会については [Stammer 1965=1976, 1980] 参照。

7) ドイツで言う「シンポジウム」は日本で言う「シンポジウム」と異なり、一般の聴衆等に開放せず、専門研究者による報告を中心とする少人数の会合を指すことが少なくない。その意味では、むしろ日本語の「コロキウム」ないし「研究会」に近い。以下で触れるシンポジウムも多くがこれに該当することに留意されたい。ドイツ語の「Tagung」も同様である。なお、日本で言うシンポジウムはドイツでは一般に「パネルディスカッション (Podiumsdiskussion)」と呼ばれることが多いようである。

8) 実を言えば、早期にウェーバー受容の進んだ日本ではこの問題はすでにさまざまなかたちで議論されている（たとえば内田 [1972] など）。だが、この問題が日本に限定された特殊な問題ではなく、むしろ世界的に主要な問題として論じられるようになってきたことが現代の特徴と言えるだろう。

9) たとえばサイド [1993]、Buck-Morss [2009] を参照。

10) 報告者の都合により当日のプログラム進行は事前の案内と異なっており、ここでは当日の実際のプログラムを紹介する。

11) たとえば、かつては知人などの執筆した伝記等で示唆されるにとどまっていたウェーバーの女性関係は、今ではウェーバー自身の書簡から事実として確認できる [z.B. MWG II/10-1: 566]。

12) ミュンヘンは、わずか1年とはいえウェーバーが病没まで住んだ都市であり、その結果ウェーバーのアーカイブが設立される（この設立を主導したのが上述『経済と社会』編集者のヴィンケルマンである）など、ウェーバー研究の拠点の一つとなっている。また上述『南ドイツ新聞』の拠点でもある。

13) たとえばウェーバーが批判した法学者ルドルフ・シュタムラーの名前が間違って記載されている [Kaube 2014: 146] ほか、方法論に関するウェーバーからの引用の仕方にも疑問が呈されている [Schlak 2014]。

14) もっとも、ラートカウ自身はウェーバーの伝記と前後して、歴史学者として「自然との和解」をテーマとする著作を刊行しているとのことである [Radkau 2013: 22]。だが逆に言えばこのことも、彼のウェーバー像には相当バイアスがかかっているのではないか、という疑念を生じさせる。

文献

- 〈ウェーバーの著作〉
- MWG I/3: Martin Riesebrodt (Hg.), *Die Landarbeiter im ostelbischen Deutschland. 1892*, 2 Bde, Mohr Siebeck, 1984.
- MWG I/22-5: Wilfried Nippel (Hg.), *Wirtschaft und Gesellschaft. Die Wirtschaft und die gesellschaftlichen Ordnungen und Mächte. Nachlaß. Teilband 5: Die Stadt*, Mohr Siebeck, 1999.
- MWG II/10-1: Gerd Krumeich und M. Rainer Lepsius (Hg.), *Briefe 1918-1920*, Bd. 1, Mohr Siebeck, 2012.
- RS I: *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I*, Mohr Siebeck, 1920.
=1972: 大塚久雄、生松敬三訳『宗教社会学論選』みすず書房.
- WuG: *Wirtschaft und Gesellschaft*. 5. Aufl., Mohr Siebeck, 1972.
=1960、1962: 世良晃志郎訳『支配の社会学』(I・II) 創文社.
=1974: 世良晃志郎訳『法社会学』創文社.
- 〈その他の文献〉
- Buck-Morss, Susan 2009: *Hegel, Haiti, and Universal History*, Univ. of Pittsburgh Press.
- Coleman, James S. 1990: *Foundations of Social Theory*, Harvard Univ. Press.
=2004, 2006: 久慈利武訳『社会理論の基礎』(上・下) 青木書店.
- Esser, Hartmut 1993: *Soziologie. Allgemeine Grundlagen*, Campus.
——— 2001: *Soziologie. Spezielle Grundlagen Bd. 6: Sinn und Kultur*, Campus.
- Ettrich, Frank and Hans-Peter Müller 2015: „Editorial“, in: *Berliner Journal für Soziologie* 24-4 (Online Version).
- Etzrodt, Christian 2006: „Handeln, soziales Handeln und Handlungstypen bei Weber und Esser unter Berücksichtigung ihrer methodologischen Ausrichtung“, in: Rainer Greshoff und Uwe Schimank (Hg.), *Integrative Sozialtheorie? Esser-Luhmann-Weber*, VS Verlag.
- Kaesler, Dirk 2014: *Max Weber. Preuße, Denker, Muttersohn*, C. H. Beck.
- 柄谷行人 1990: 『マルクス その可能性の中心』講談社 (学術文庫版).
- Kaube, Jürgen 2014: *Max Weber. Ein Leben zwischen den Epochen*, Rowohlt.
- 久慈利武 2013: 「ドイツ語圏の合理的選択社会学者群像——リンデンバーク、エサー、オブ」『人間情報学研究』18: 59-78.
- Mitzman, Arthur 1969: *The iron cage. An historical interpretation of Max Weber*, Knopf.
=1975: 安藤英治訳『鉄の檻』創文社.
- Mommsen, Wolfgang J. 1959: *Max Weber und die deutsche Politik 1864-1920*, Mohr Siebeck.
=1993, 1994: 安世舟、五十嵐一郎、田中浩訳『マックス・ウェーバーとドイツ政治1890-1920』(I・II) 未来社.
- Norkus, Zenonas 2001: *Max Weber und Rational Choice*, VS Verlag.
- 折原浩 1988: 『マックス・ウェーバー基礎研究序説』未来社.
——— 1996: 『ウェーバー『経済と社会』の再構成——トルソの頭』東京大学出版会.
- Radkau, Joachim 2013: *Max Weber. Die Leidenschaft des Denkens*, 2. Aufl., dtv. (1. Aufl. 2005)
- Said, Edward 1993: *Culture and imperialism*, Vintage.
=1998, 2001: 大橋洋一訳『文化と帝国主義』(1・2) みすず書房.
- Schlak 2014: „Über die Wirkung eines Jahrhundertdenkens“, *Die Welt*, 10. 2. 2014.
- Schluchter, Wolfgang 1988: *Religion und Lebensführung*, 2 Bde, Suhrkamp.
——— 2005: „Max Weber — ein Vater von ‚Rational Choice‘?“, ders., *Handlung, Ordnung und Kultur*, Tübingen: Mohr Siebeck, 221-228.
——— 2009: *Wirtschaft und Gesellschaft. Entstehungs- geschichte und Dokumente*. (MWG I/24), Mohr Siebeck.
- シュルプター、W./折原浩 2000: 『『経済と社会』再構成論の新展開』未来社.
- Stammer, Otto 1965: *Max Weber und Soziologie heute. Verhandlungen des 15. deutschen Soziologentag*, Mohr Siebeck.
=1976: 出口勇蔵監訳『ウェーバーと現代社会学』木鐸社.
- Tenbruck, Friedrich 1977 (1999): „Abschied von ‚Wirtschaft und Gesellschaft‘“, in: Friedrich Tenbruck, Harald Homann (Hg.), *Das Werk Max Webers. Gesammelte Aufsätze zu Max weber*, Mohr Siebeck, 1999.
- Thomas, Peter 2006: „Being Max Weber“, in: *New Left Review* 41, pp. 147-158.
- 富永健一 1995: 『行為と社会システムの理論』東京大学出版会.
- 内田芳明 1972: 『ウェーバーとマルクス』岩波書店.
- Weber, Marianne 1926: *Max Weber. Ein Lebensbild*, Mohr Siebeck.
- Winckelmann, Johannes 1986: *Max Webers hinterlassenes Hauptwerk*, Mohr Siebeck.